



体育研究所 教育カリキュラムについて



慶應の体育は、授業が面白い！

多種多様なスポーツで楽しむ！

体育実技の種目数は45種目！(2016年度)。サッカーやバレーボールといった馴染みのあるスポーツだけでなく、ヨガ、アーチェリー、自動車といったこれまでにないスポーツも始められます。好きな種目を履修し続けることもできるし、まったく経験のない種目に挑戦して大学デビューも可能です！

また、夏や冬は海へ山へ、新しい仲間と共に自然の中でスポーツ！自然の中でのスポーツは、普段のスポーツとひと味違う。自然のエネルギーを上手く使いながら行うスポーツの奥深さをぜひ体感してください。

区分	種目名	区分	種目名
球技	1 サッカー	個人種目	20 フィットネストレーニング
	2 フットサル		21 エアロビクス
	3 テニス		22 ボディメイクエクササイズ
	4 ソフトテニス		23 ヨガ&ピラティス
	5 バドミントン		24 バレエエクササイズ
	6 バスケットボール		25 陸上競技
	7 バレーボール		26 ジョギング
	8 ハンドボール		27 ウォーキングエクササイズ
	9 ゴルフ		28 水泳
	10 野球		29 器械体操
	11 軟式野球		30 トランポリン
	12 ソフトボール		31 アーチェリー
	武道格技		13 卓球
14 合気道		33 太極拳	
15 剣道		34 自動車	
16 柔道		35 フライングディスク	
17 空手		36 ニュースポーツ	
18 ボクシング		37 バックカントリースキル	
19 フェンシング			

区分	種目名
夏季	1 ビーチバレー
	2 馬術
	3 ヨット
	4 マリンアクティビティ
	5 Nature & Trail
	6 アウトドアレクリエーション
冬季	7 スキー
	8 スケート



スポーツを知識として学ぶ！

体育は、するだけではなく、知識・学問としても学ぶことができます。各教員が、最新の研究内容をまぜた授業を展開しています。スポーツをするとどのような良いことがあるのだろう、スポーツと社会の関係、スポーツと心など教養をたかめることができるし、自身のスポーツ活動にも活かすことができます。

区分	種目名
講義	1 スポーツの効用を科学的にみる(スポーツ総論)
	2 スポーツの技と文化を探る
	3 スポーツ心理学の世界
	4 スポーツと身体(からだ)の基礎理論
	5 スポーツコーチング概論
	6 スポーツ現場のコーチングと安全教育
	7 健康と運動の科学
演習	8 スポーツ現場における救急法の基礎

体育研究所 スポーツ振興について

Enjoy Sports KEIO!

体育研究所では、様々なスポーツイベントを通して、主に塾生・塾員に対しスポーツ振興を行っています！2008年にスポーツ棟が完成し、スポーツ・コーディネート・オフィスを拠点として様々な情報を提供しています。

主なスポーツイベント

【スポーツ大会】

- 塾長杯フットサル大会
- 塾長杯バレーボール大会
- 塾長杯バスケットボール大会
- 新春塾内卓球大会

【公開講座】

- ヨガ教室
- ピラティス教室

【その他】

- スキー・スノーボードの集い
- トレーニングルーム開放(トレーニングアドバイス)



塾長杯バスケットボール大会



塾長杯フットサル大会



塾長杯バレーボール大会

塾長杯は、塾生を対象としたスポーツイベントで毎年各大会200名以上の塾生が参加しています。フットサルはレベル分けをしていますが、バスケットおよびバレーボール大会は、初心者中心のエンジョイリーグ、経験者中心のチャンピオンリーグの2リーグに分けて開催しており、経験・未経験、男女問わず、たくさんの塾生が参加し、白熱した試合がいくつも展開される大会となっています！



新春塾内卓球大会は、塾生だけでなく、卒業生、教職員からも参加する極めてアットホームな雰囲気のある大会です。シングルス・ダブルスの2種目を、温泉・中級・上級の3レベルに分けて開催をしており、様々な人との交流が生まれるのもこの大会の特徴です！

慶應義塾大学体育研究所「基盤研究」について

体育研究所では、2011年12月に「慶應義塾の体育・スポーツを問い直す」と題し、研究所設立50周年記念シンポジウムを開催しました。大学の体育教育が担う課題として、「大学に於ける体育はどうあるべきか」、「スポーツにおける大学と地域の連携」、「大学体育教員の使命」、そして「体育研究所は今後どのような活動をすべきか」について議論が行われました。このシンポジウムの議論がもとになり、体育研究所として明確にテーマをもって継続的な研究を展開する必要性がその後確認され、「基盤研究」という位置づけで継続的なプロジェクトを展開することとなりました。「基盤研究」では、「体育」という視座を中心に研究を展開しようとするテーマを設定しました。それは、①FD実践としての体育授業プログラムの在り方、②学生スポーツの行動と大学におけるスポーツ、③大学体育の教育理念とカリキュラム、です。「基盤研究」を「体育」という視座から展開するということは、体育研究所が実施している授業やその他のサービスプログラムについて教育学的意義や効果の検討を進めることを意味しています。現在進行中のプロジェクトであり、具体的な成果を示すまでには至りませんが、それぞれのテーマについてここで現状をご報告させていただきます。

基盤研究 コアテーマ①-1

『自己効力感及び社会的スキルの向上に寄与する体育実技プログラムの開発』

班長：村松憲

班員：村山光義・板垣悦子・野口和行

体育実技が自己効力感や社会的スキルにどのような影響を及ぼすのだろうか？本グループのこれまでの研究成果を報告する。

【報告1】学生の成長に寄与する体育科目の再構築に向けた基礎的検討～一般性自己効力感、社会的スキルの変化に着目して～（慶應義塾大学体育研究所紀要第50巻、2011年）

自己効力感とは行動の遂行可能性の認知を意味しており、心身の健康維持増進を考える上で重要であると考えられており、変容可能と考えられるために教育の場でも重視されるようになりつつある。一方社会的スキルとは対人関係を保つためのスキルであり、社会心理学や行動分析学の分野で研究課題とされているものである。658名の学生を対象に、学期の初旬と下旬にアンケート調査を行った。

図1はGSESの1回目と2回目の得点について、実技なし、個人種目、集団種目ごとに示したものである。実技なしでは1回目と2回目の得点に有意差は見られなかったが、個人種目と集団種目では1回目に対して2回目の得点が有意に上昇した。個人種目と集団種目を合わせた「実技あり」グループと実技なしの比較では、1回目には有意差が見られないが、2回目では実技ありグループが有意に高い得点を示していた。

図2は社会的スキルの1回目と2回目について、実技なし、個人種目、集団種目ごとに男女別で示したものである。実技なし女子、個人種目男子および女子、集団種目男子においては1回目に対して2回目の得点が有意に上昇したが、実技なし男子、集団種目女子においては有意差が見られなかった。また個人種目と集団種目を合わせた実技ありグループ全体では、男女ともに1回目に対する2回目の得点の有意な変化は見られなかった。これらの結果より、体育実技の履修によってGSESの向上が期待できることが示唆された。社会的スキルについては個人種目・集団種目男子および、個人種目女子においては有意な上昇が見られたことから、体育実技の影響が示唆される結果となっていた。しかしながら女子においては実技なしグループでも得点が有意に上昇していることから、体育実技以外においても他者との関わりや未知の授業体験なども、社会的スキルに影響を及ぼしている可能性が考えられる。

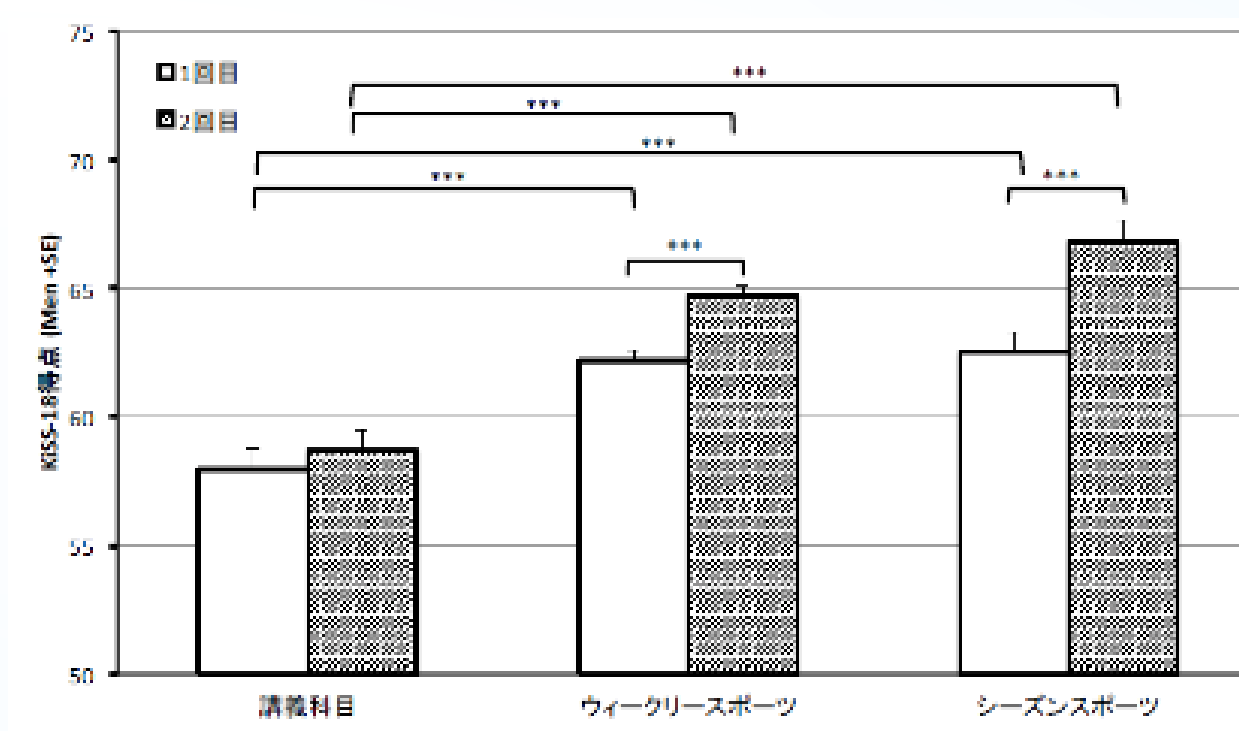


図6. 講義、ウィークリー、シーズンスポーツにおける社会的スキル（KISS-18）の1回目と2回目のアンケート得点

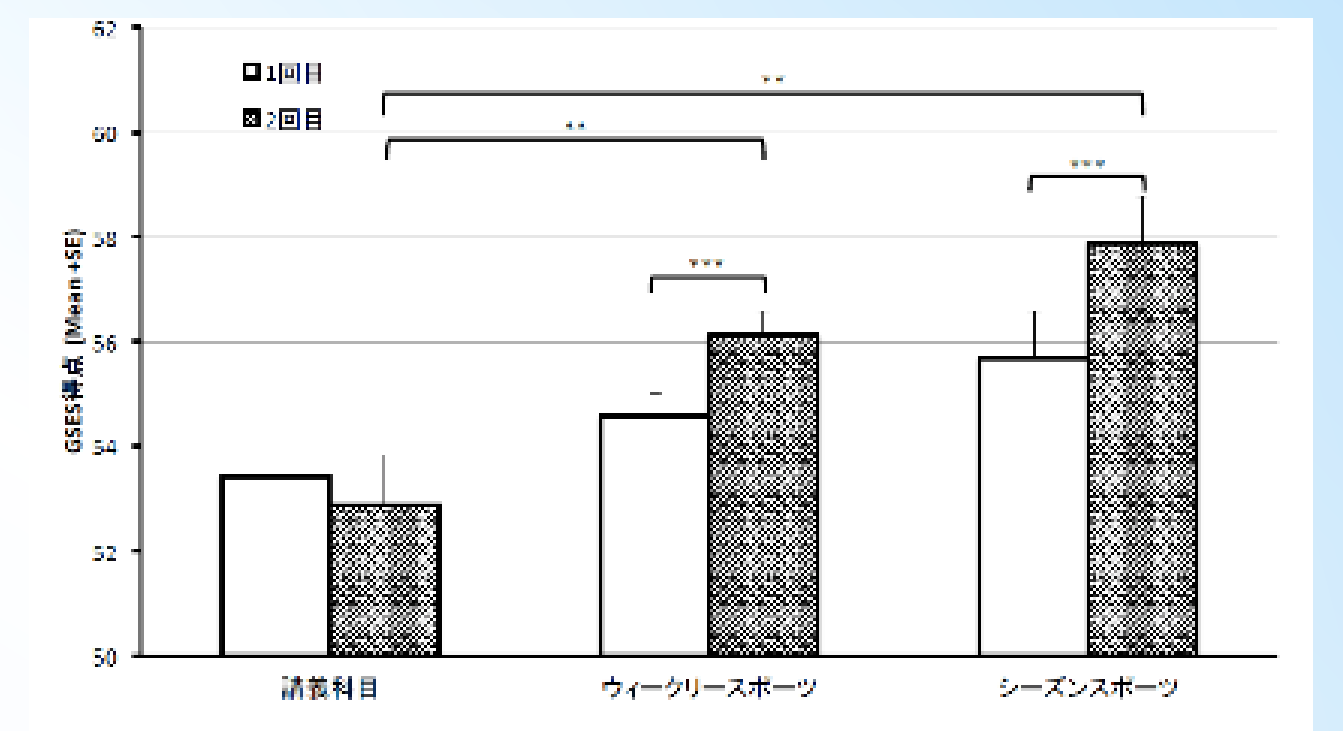


図7. 講義、ウィークリー、シーズンスポーツにおける自己効力感（GSES）の1回目と2回目のアンケート得点

【報告5】体育実技に伴ってライフスキルがどのように変化するか（慶應義塾大学体育研究所基盤研究レポート、2016年1月）

「ライフスキル」は「日常生活で生じるさまざまな問題や要求に対して、建設的かつ効果的に対処するために必要な能力」とWHOが定義しており（1997）、慶應義塾大学においてもSFCキャンパスの体育実技において、ライフスキルのアンケート調査により自己評価を行っている。本班では2014年度に、島本ら（2013）のアンケートを用いて授業序盤と授業終盤の得点を比較した。図8に示したように、10項目中5項目で、有意に得点が増加していた。「体育実技の実施によってライフスキルが向上する」という可能性が示唆される結果であった。もちろん、体育実技以外の要因による向上も考えられるため、今後の調査が必要である。

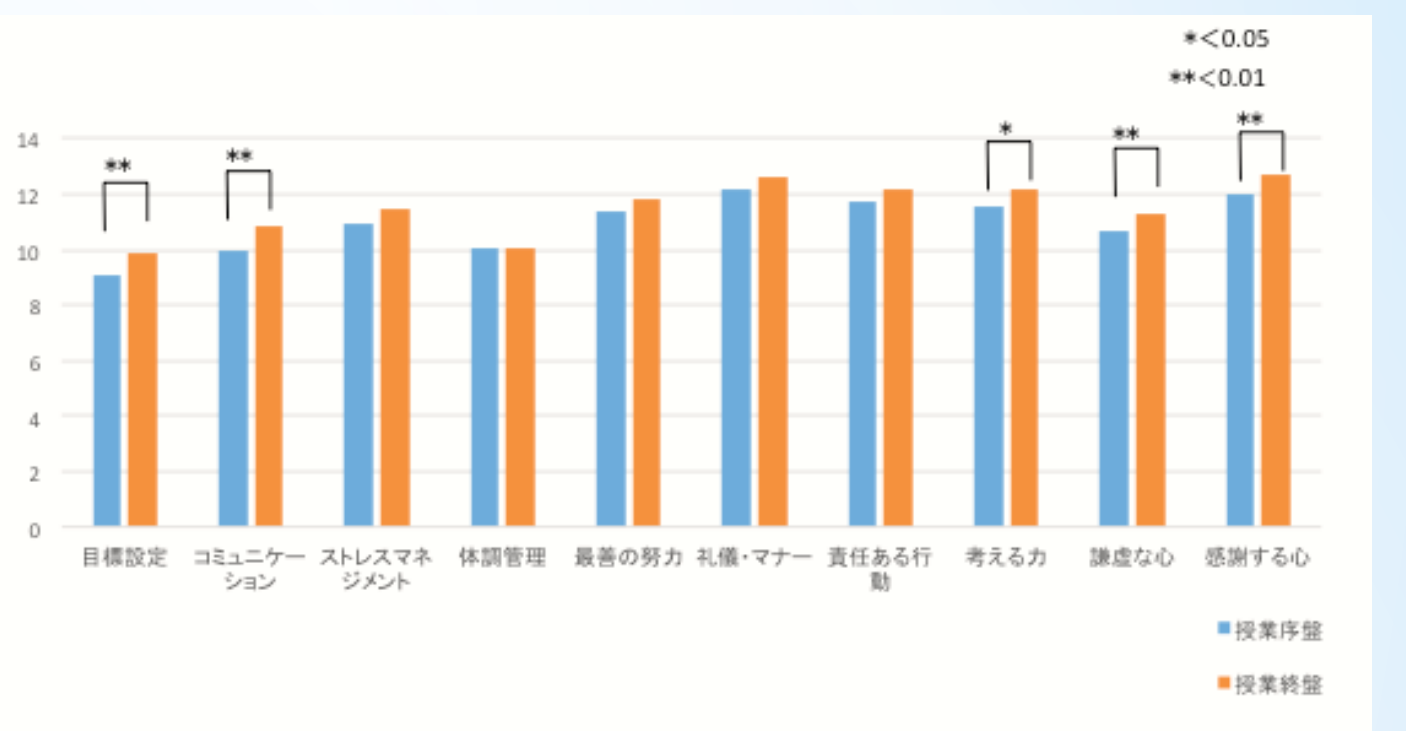


図8. ライフスキル得点 授業序盤と終盤での得点比較

基盤研究 コアテーマ①-2

『大学体育において教員は履修者の運動・スポーツに対する内発的な動機づけに貢献するか？-大学体育における動機づけ雰囲気への検討』

班長：山内賢

班員：佐々木玲子・加藤大仁・永田直也・近藤明彦

はじめに
本班は、大学生の運動やスポーツ活動に対する動機づけを高める授業づくりに関する研究を行っている。運動やスポーツ活動は、身体的な健康の維持・増進のみならず、メンタルヘルスやコミュニケーション力などの心理社会的な要因にも影響を与えている。そのため、運動やスポーツ活動に対する動機づけを高めることは、心身ともに豊かな生活のために必須である。運動やスポーツ活動に対する動機づけと体育授業の関係は、小・中学校での体育授業、大学生の高校で受けた授業内容に関する研究がある。これらの研究では、活動に対する「内発的動機づけ」、授業において内発的動機づけを高める「上達を重視する（熟達志向的）雰囲気」の有効性に関する報告がなされている。そこで今回の報告では、授業における動機づけ雰囲気に注目し、①大学の体育授業の現状分析、②塾生が考える動機づけを高める教師の指導・関わり方に関する調査、③新たな測定尺度の作成を示し、今後の研究活動の展望を述べる。

①大学体育授業の現状分析

まず始めに、現在の体育授業は、履修者の動機づけにどのような影響を与えているか測定・分析した。測定結果は、図1で示した。慶應義塾大学の体育実技では、履修者の授業前の動機づけは高く（内発的）、授業後もその動機づけが維持されていることがわかった。また、種目によっては、授業後により高い動機づけとなることもわかった。しかし、どのような要因が動機づけの維持・向上に影響しているのかは不明なままであった。

②塾生が考える動機づけを高める教師の指導・関わり方に関する調査

履修者の運動やスポーツ活動に対する動機づけを高める要因の検証のため、塾生に対して「運動やスポーツ活動に対する動機づけを高める教師の指導や関わり方」を自由記述アンケートにて聴取した。動機づけ雰囲気には、教師が果たす役割が大きいことがわかっており、本研究ではその点に注目した。聴取内容の例を表1に示す。聴取内容をみていくと、大きく「塾生の取り組みをどの要素（熟達か結果か）で評価しているか」、「塾生を適切に評価しているか」、「教員の塾生に対してどのような態度をとっているか」という要因が影響しているのわかる。この調査を踏まえ、動機づけを高める教師の指導・関わり方を評価する尺度の作成を実施した。

③新たな尺度の作成

現在、調査②の結果をもとに、塾生の運動やスポーツ活動に対する動機づけを高める教師の指導・関わり方を評価する尺度の作成を実施している。作成中の尺度は、表2に示した。塾生に対する測定と因子分析の結果、「熟達への評価」、「熟達への指導」、「成績の重視」、「生徒に対するひいき」という4つの因子に分類された。現在は、質問項目・因子名の再検討を実施している。

今後の研究活動の展望

今後の研究では、まず始めに、作成した尺度を用いて履修者の動機づけが高まる要因を明らかにする。その上で、動機づけを高める授業方法を考案していくこととなる。大学体育授業は、履修者が教育機関において受ける最後の体育授業となる可能性が高く、運動やスポーツ活動を継続する態度を養う最後の機会かもしれない。そのような重要な機会において、教師・授業が果たす役割は大きく、今後もより良い授業に資する知見が得られるように進めたい。

評価する際の要因	動機づけを高める	下げる教師の指導・関わり方のまとめ	動機づけを上げる指導・関わり方
評価の適切さ	改善方法を教える	その種目が上手く指導	具体的な改善の指導がない
教師の態度	目標・目的が明確な指導をしてくれる	最初心でできていないと責めてくれる	個人に合う指導をしない
	上達した時に褒めてくれる	上達した時に褒めてくれる	ミスを含める
	平等に接してくれる	特定の人のみ関わる	コミュニケーションを拒否
	学生の状態を理解している	活動を認めてくれる	名前や顔を覚えていない
	名前や顔を覚えてくれる	成長させようとする	人によって対応を変えている
	楽しそうに授業をしている	チーム全員と関わる	つまらなさそうに授業をやっている
	積極的に声をかけてくれる	いつでも質問できる	関係いふりをする
			威圧的

因子	質問項目
熟達への評価	私が課題を克服した際にほめてくれる 私が上達した時にほめてくれる 失敗は上達するために必要だと伝えてくれる 私たちの努力を評価してくれる
熟達への指導	私たちが上達するための明確な目標を示してくれる 私たちが上達するための改善点を教えてくれる 私たちの質問にいつでも答えてくれる
成績の重視	私たちが上手くプレーできないと落胆する 私たちができない点ばかり指摘する 私をほかの人と比較する
生徒に対するひいき	人によって対応を変えている 私の存在に気を留めていない スポーツが出来る人とのみ関わる 私たち一人一人をみていない

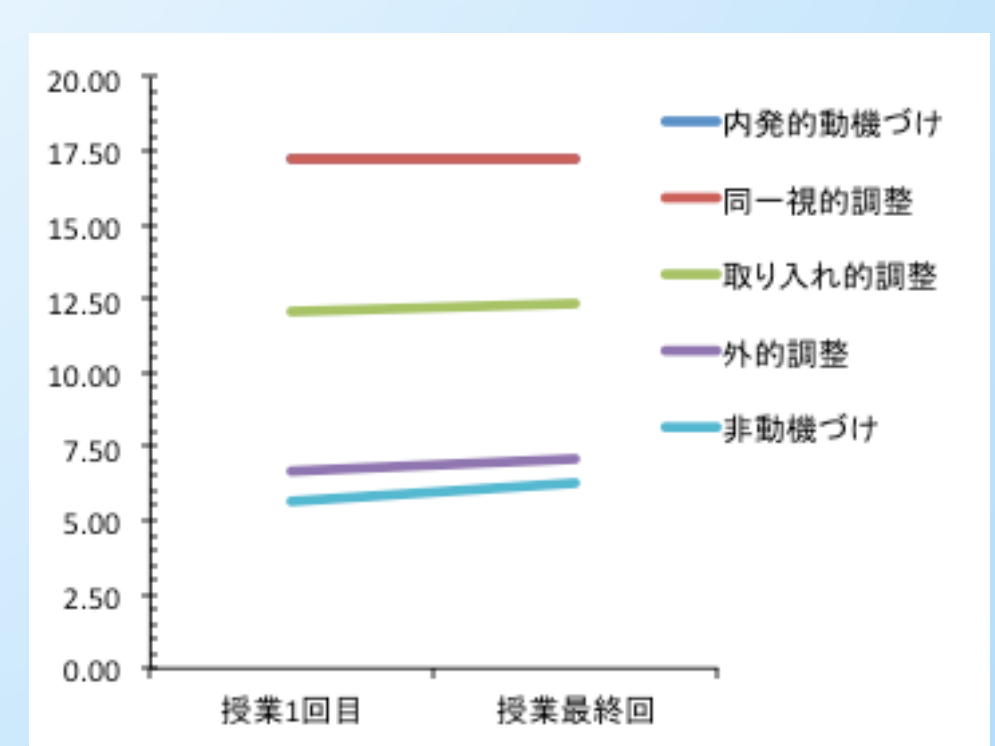


図9. 体育授業前後における運動やスポーツに対する動機づけの変化

【報告2】体育実技履修学生の社会的スキルおよび自己効力感の水準に関する基礎的検討（慶應義塾大学体育研究所紀要 第52巻、2013年）

本塾における体育実技履修者を対象に、KISS-18（社会的スキルの指標）およびGSESアンケートを実施し、特に年齢・学年の差、得点分布の実態、春学期と秋学期の変化の有無に関して基礎的検討を行うことを目的とした。図3は社会的スキルとGSES(自己効力感)の学年別得点を示す。全体として、学年が進むにつれて得点が向上する傾向がみられた。図4は社会的スキルとGSESの体育実技実施に伴う変化を示す。1回目（春学期初旬）から4回目（秋学期下旬）に向けて得点が向上する傾向がみられた。

本研究より、社会的スキルや自己効力感に経年による経験の影響、さらには体育実技の実施により高まり、しかもそれは連続履修によって強められる可能性が示唆された。

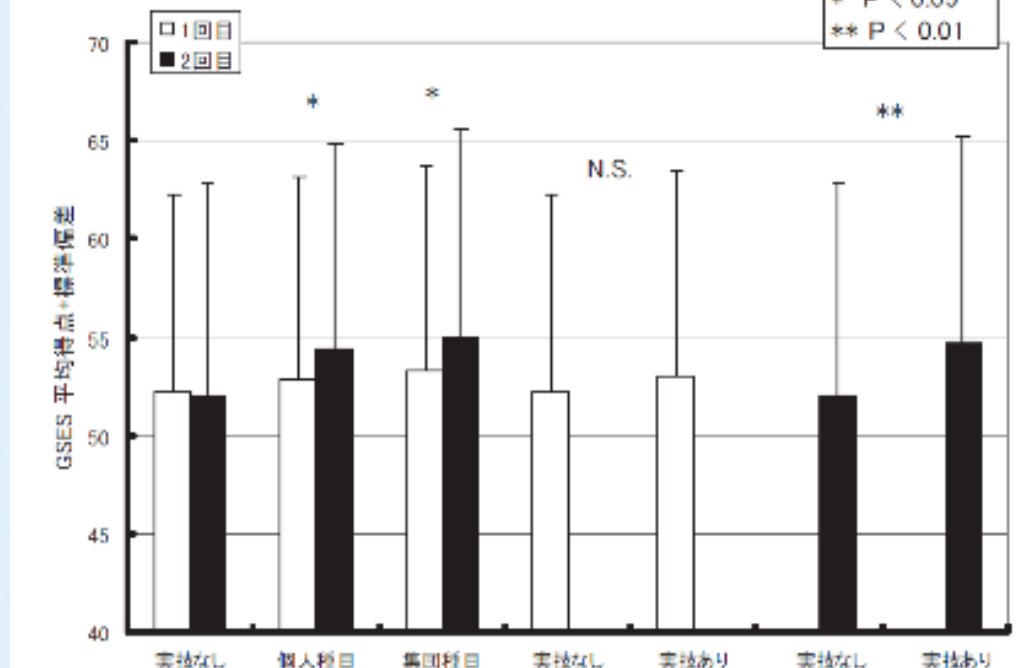


図1. GSESの1回目と2回目の得点および実技履修の有無の比較

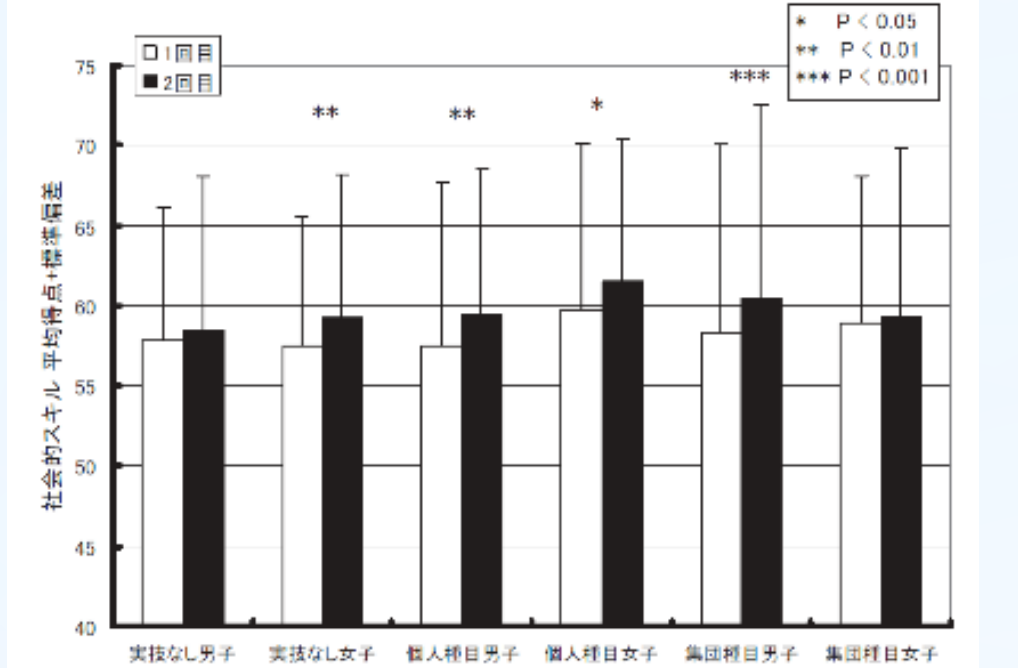
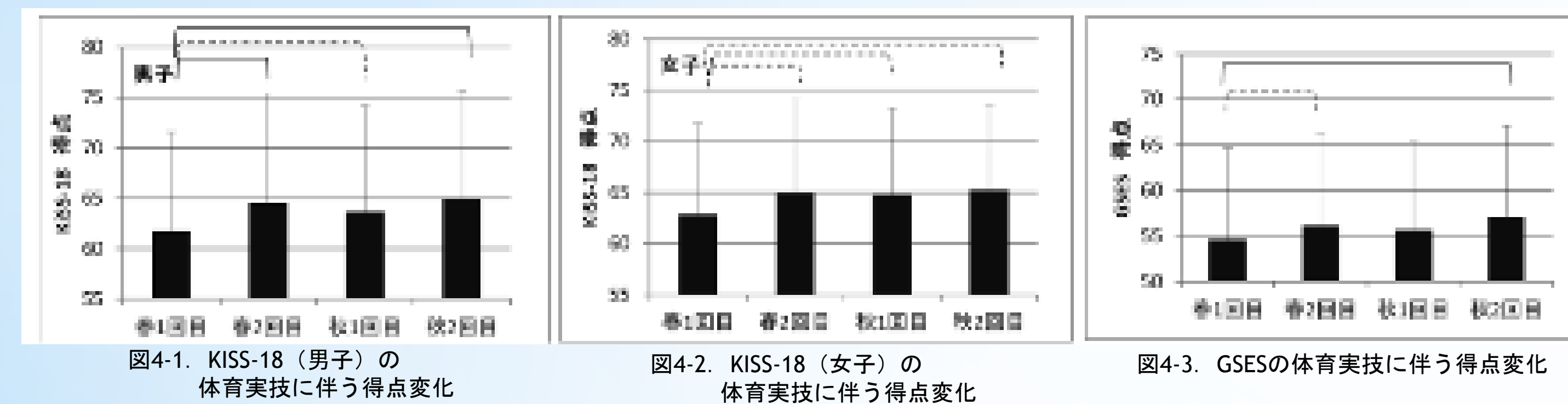
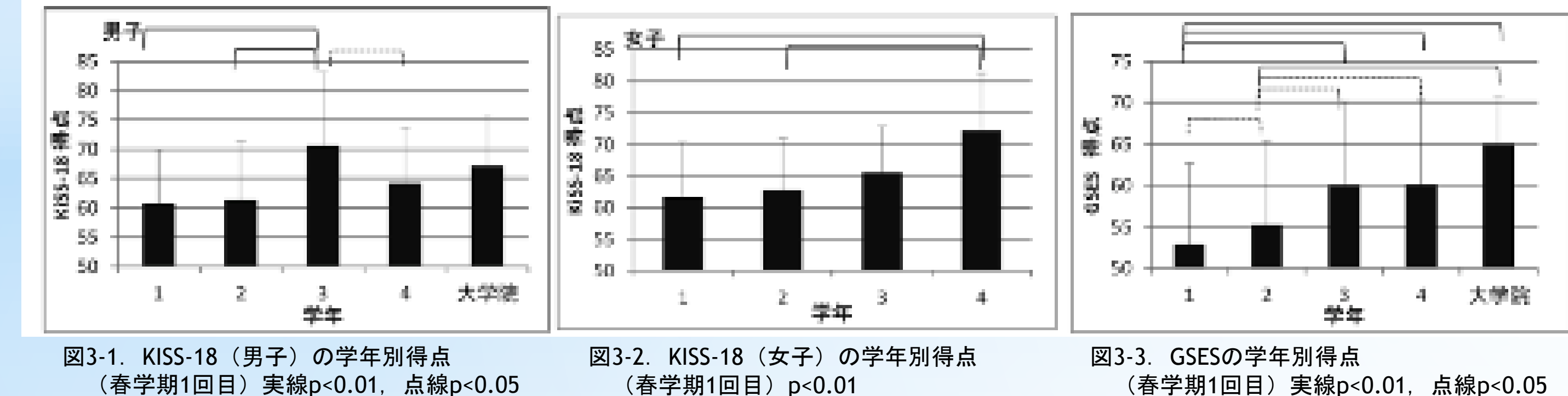


図2. 社会的スキルの1回目と2回目の得点の比較



【報告3】学生の社会的スキル向上を目指した体育実技実践の試み（慶應義塾大学体育研究所紀要 第52巻、2013年）

本研究においては大学における体育実技実施の効果に関して対人関係能力の向上を意図し、コミュニケーションの促進を図るプログラムを取り入れることによる社会的スキル及び自己効力感の変化を検討することを目的とした。プログラム群ではこれまで実施してきた授業展開の中に、コミュニケーション作りやグループワークを意識した内容を毎時間加えた。図5は、プログラム群において得点が有意に向上していることを示している。体育実技が学生のメンタルヘルスの維持や積極的な社会参加に寄与できること、また授業内容を工夫することによってその効果をより高められることが示唆された。

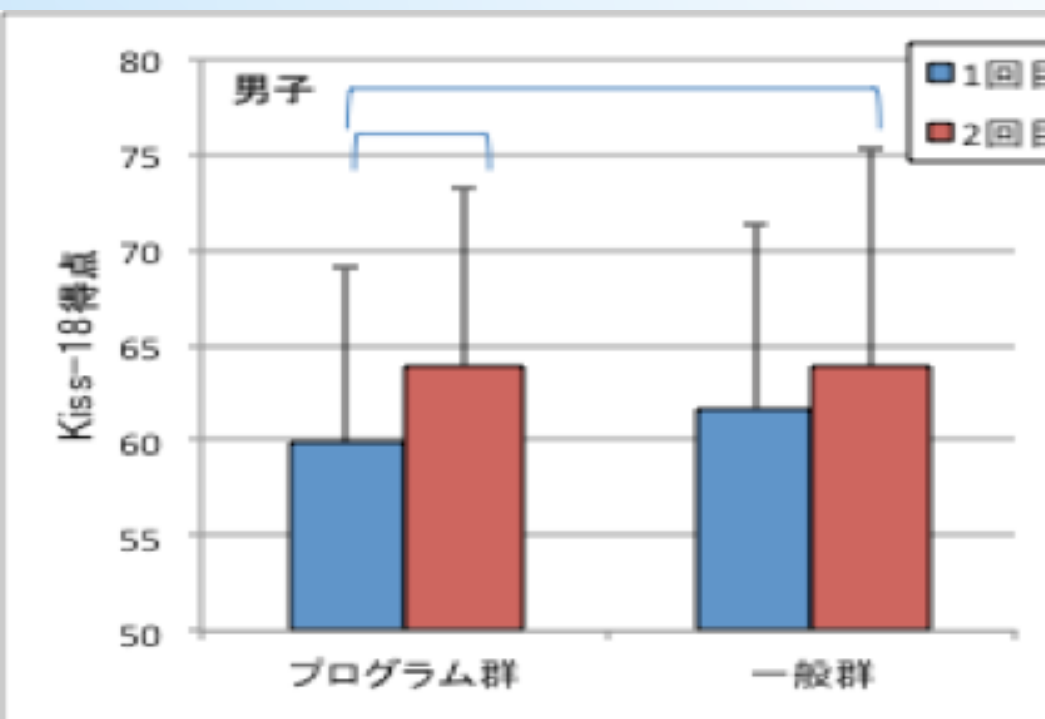


図5-1. KISS-18 (男子) のプログラム群と一般群の体育実技受講に伴う得点変化

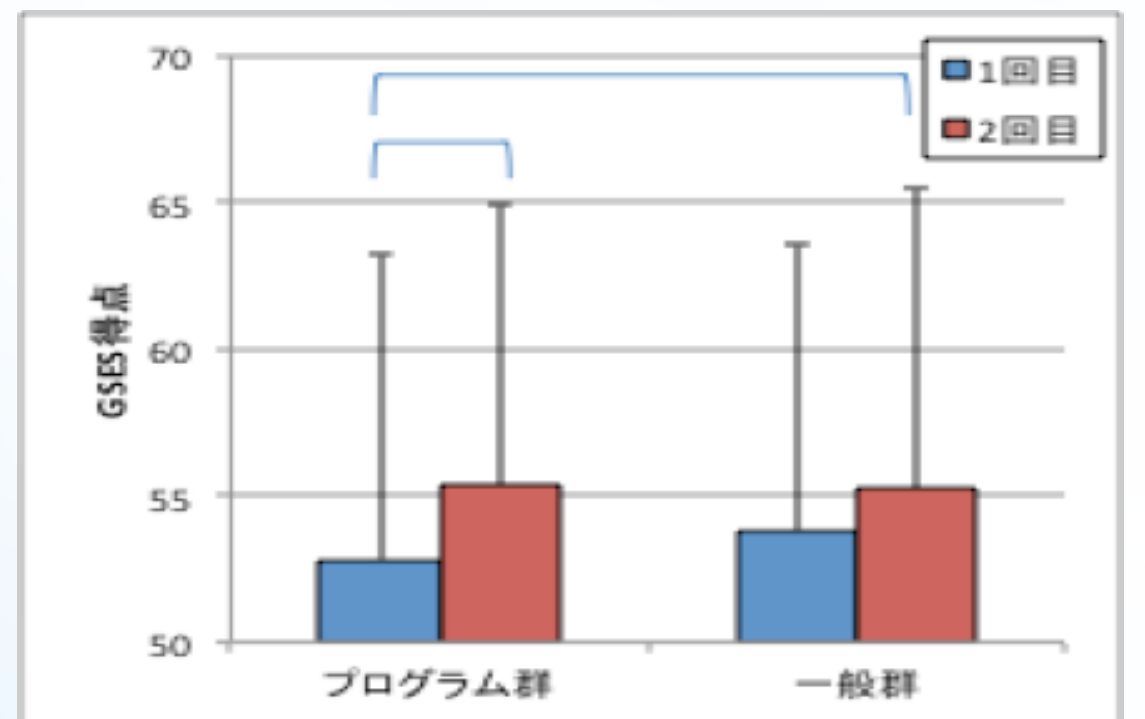


図5-2. GSESのプログラム群と一般群の体育実技受講に伴う得点変化

【報告4】体育実技履修学生の社会的スキル及び自己効力感の変容に関する検討-授業形態の違いによる比較-（慶應義塾大学体育研究所紀要 第54巻、2015年）

夏季または春季休業中に7日間または3泊4日程度の合宿形式で行う集中授業（シーズンスポーツ）においては、受講者の社会的スキルや自己効力感（GSES）の得点変化が通常の体育実技授業（ウィークリースポーツ）や講義授業と異なるであろうか。

図6、7のように、講義科目とウィークリースポーツの間、および講義科目とシーズンスポーツの間に有意な差が見られたが、ウィークリースポーツとシーズンスポーツの間には有意な差が見られなかった。

Nagata, N., Yamauchi, K., Sasaki, R., Kato, H., and Kondo, A. (2015) Influences of different sport types on student motivation in college physical education classes. International Society of Sport Psychology 50th Anniversary Seminar. Proceeding, pp.68-69.
Nagata, N., Yamauchi, K., Sasaki, R., Kato, H., and Kondo, A. (2014). Relationship between the motivational climate and motivation of participation for exercise in college physical education classes. Proceeding of the 9th German-Japan Sport Science Symposium: pp.21-22.
Nagata, N., Yamauchi, K., Sasaki, R., Kato, H., and Kondo, A. (2014). A study of the validity of the motivational climate questionnaire for college physical education. CD Proceeding of 7th Asian-South Pacific Association of Sport Psychology International Congress.
永田直也・近藤明彦 (2015) 学生が見た授業時に「教師が果たす機能」について。日本スポーツ心理学会第42回大会研究発表抄録集: pp.198-199.
永田直也・山内賢・佐々木玲子・加藤大仁・近藤明彦 (2014) 大学における教養体育の授業が学生の運動に対する動機づけに与える影響。日本体育学会第65回大会予稿集: p.111.

慶應義塾大学体育研究所「基盤研究」について

体育研究所では、2011年12月に「慶應義塾の体育・スポーツを問い直す」と題し、研究所設立50周年記念シンポジウムを開催しました。大学の体育教育が担う課題として、「大学に於ける体育はどうあるべきか」、「スポーツにおける大学と地域の連携」、「大学体育教員の使命」、そして「体育研究所は今後どのような活動をすべきか」について議論が行われました。このシンポジウムの議論がもとになり、体育研究所として明確にテーマをもって継続的な研究を展開する必要性がその後確認され、「基盤研究」という位置づけで継続的なプロジェクトを展開することとなりました。「基盤研究」では、「体育」という視座を中心に研究を展開しようとするテーマを設定しました。それは、①FD実践としての体育授業プログラムの在り方、②学生スポーツの行動と大学におけるスポーツ、③大学体育の教育理念とカリキュラム、です。「基盤研究」を「体育」という視座から展開するということは、体育研究所が実施している授業やその他のサービスプログラムについて教育学的意義や効果の検討を進めることを意味しています。現在進行中のプロジェクトであり、具体的な成果を示すまでには至りませんが、それぞれのテーマについてここで現状をご報告させていただきます。

基盤研究 コアテーマ①-1

『自己効力感及び社会的スキルの向上に寄与する体育実技プログラムの開発』

班長：村松憲

班員：村山光義・板垣悦子・野口和行

体育実技が自己効力感や社会的スキルにどのような影響を及ぼすのだろうか？本グループのこれまでの研究成果を報告する。

【報告1】学生の成長に寄与する体育科目の再構築に向けた基礎的検討～一般性自己効力感、社会的スキルの変化に着目して～（慶應義塾大学体育研究所紀要第50巻、2011年）

自己効力感とは行動の遂行可能性の認知を意味しており、心身の健康維持増進を考える上で重要であると考えられており、変容可能と考えられるために教育の場でも重視されるようになりつつある。一方社会的スキルとは対人関係を保つためのスキルであり、社会心理学や行動分析学の分野で研究課題とされているものである。658名の学生を対象に、学期の初旬と下旬にアンケート調査を行った。

図1はGSESの1回目と2回目の得点について、実技なし、個人種目、集団種目ごとに示したものである。実技なしでは1回目と2回目の得点に有意差は見られなかったが、個人種目と集団種目では1回目に対して2回目の得点が有意に上昇した。個人種目と集団種目を合わせた「実技あり」グループと実技なしの比較では、1回目には有意差が見られないが、2回目では実技ありグループが有意に高い得点を示していた。

図2は社会的スキルの1回目と2回目について、実技なし、個人種目、集団種目ごとに男女別で示したものである。実技なし女子、個人種目男子および女子、集団種目男子においては1回目に対して2回目の得点が有意に上昇したが、実技なし男子、集団種目女子においては有意差が見られなかった。また個人種目と集団種目を合わせた実技ありグループ全体では、男女ともに1回目に対する2回目の得点の有意な変化は見られなかった。これらの結果より、体育実技の履修によってGSESの向上が期待できることが示唆された。社会的スキルについては個人種目・集団種目男子および、個人種目女子においては有意な上昇が見られたことから、体育実技の影響が示唆される結果となっていた。しかしながら女子においては実技なしグループでも得点が有意に上昇していることから、体育実技以外においても他者との関わりや未知の授業体験なども、社会的スキルに影響を及ぼしている可能性が考えられる。

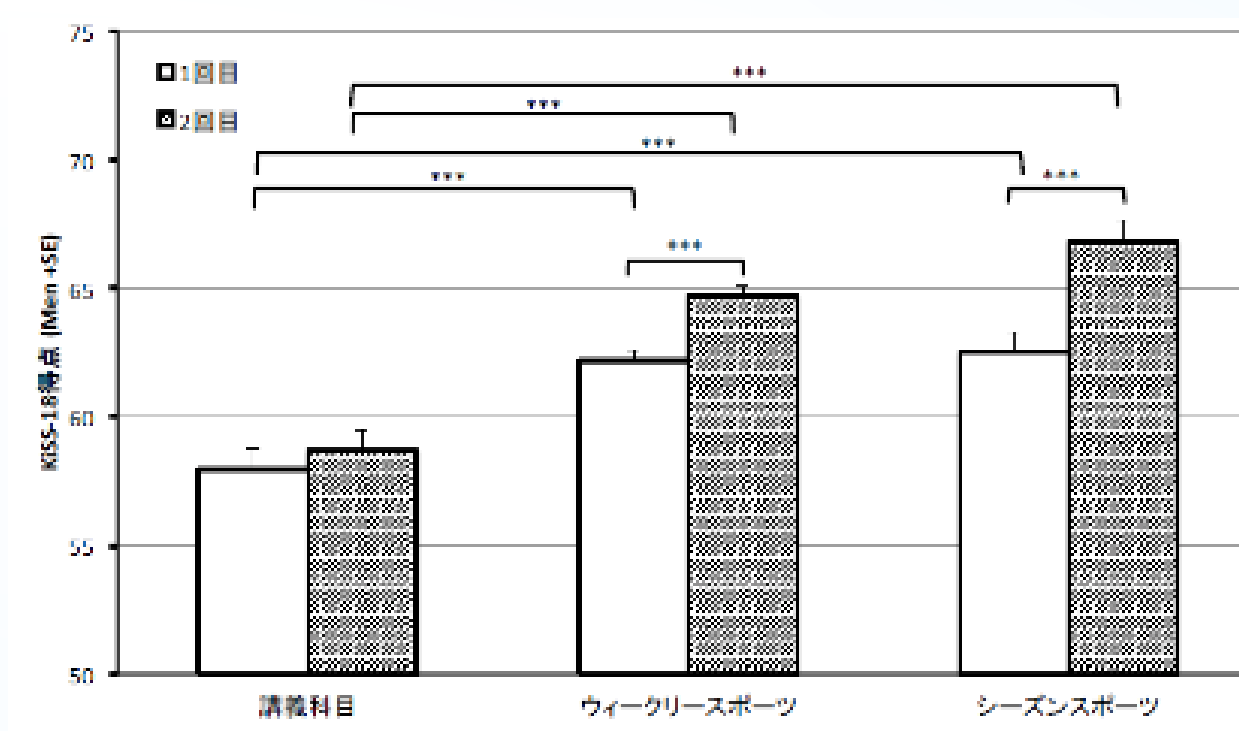


図6. 講義、ウォークリー、シーズンスポーツにおける社会的スキル（KISS-18）の1回目と2回目のアンケート得点

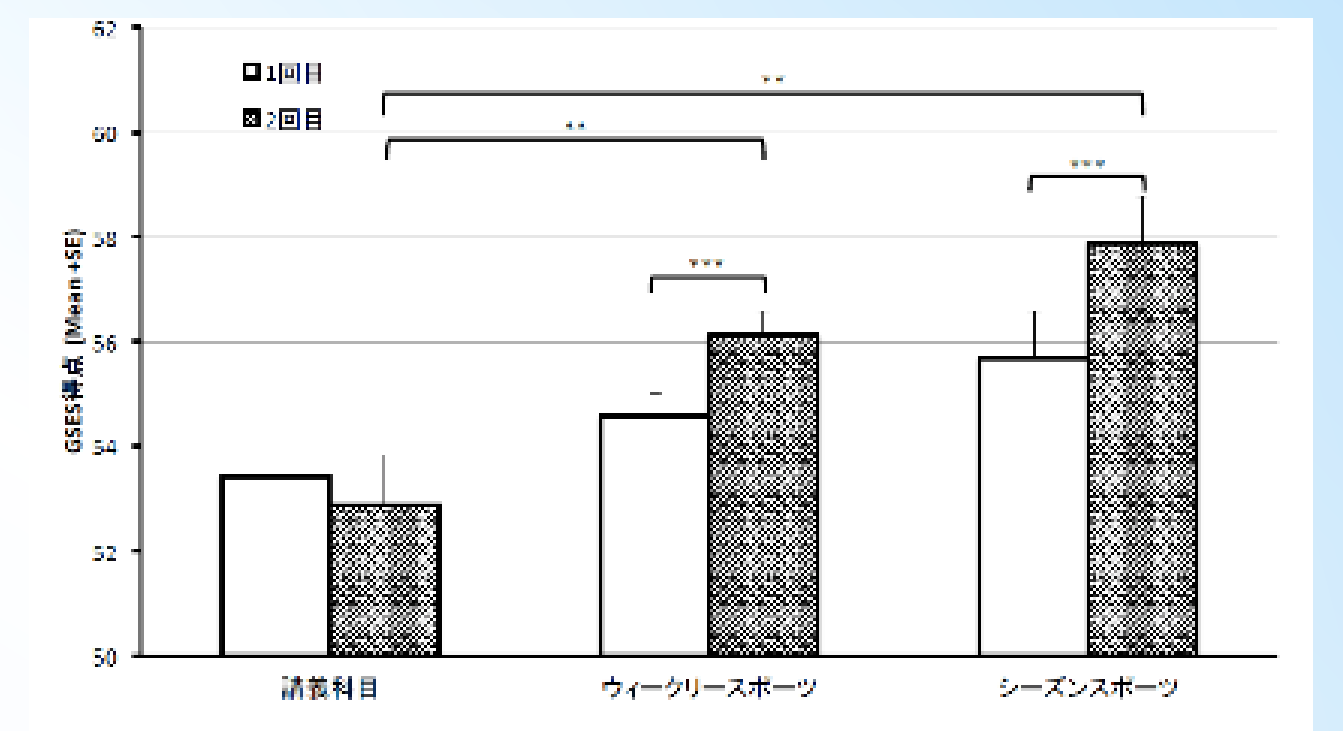


図7. 講義、ウォークリー、シーズンスポーツにおける自己効力感（GSES）の1回目と2回目のアンケート得点

【報告5】体育実技に伴ってライフスキルがどのように変化するか（慶應義塾大学体育研究所基盤研究レポート、2016年1月）

「ライフスキル」は「日常生活で生じるさまざまな問題や要求に対して、建設的かつ効果的に対処するために必要な能力」とWHOが定義しており（1997）、慶應義塾大学においてもSFCキャンパスの体育実技において、ライフスキルのアンケート調査により自己評価を行っている。本班では2014年度に、島本ら（2013）のアンケートを用いて授業序盤と授業終盤の得点を比較した。図8に示したように、10項目中5項目で、有意に得点が増加していた。「体育実技の実施によってライフスキルが向上する」という可能性が示唆される結果であった。もちろん、体育実技以外の要因による向上も考えられるため、今後の調査が必要である。

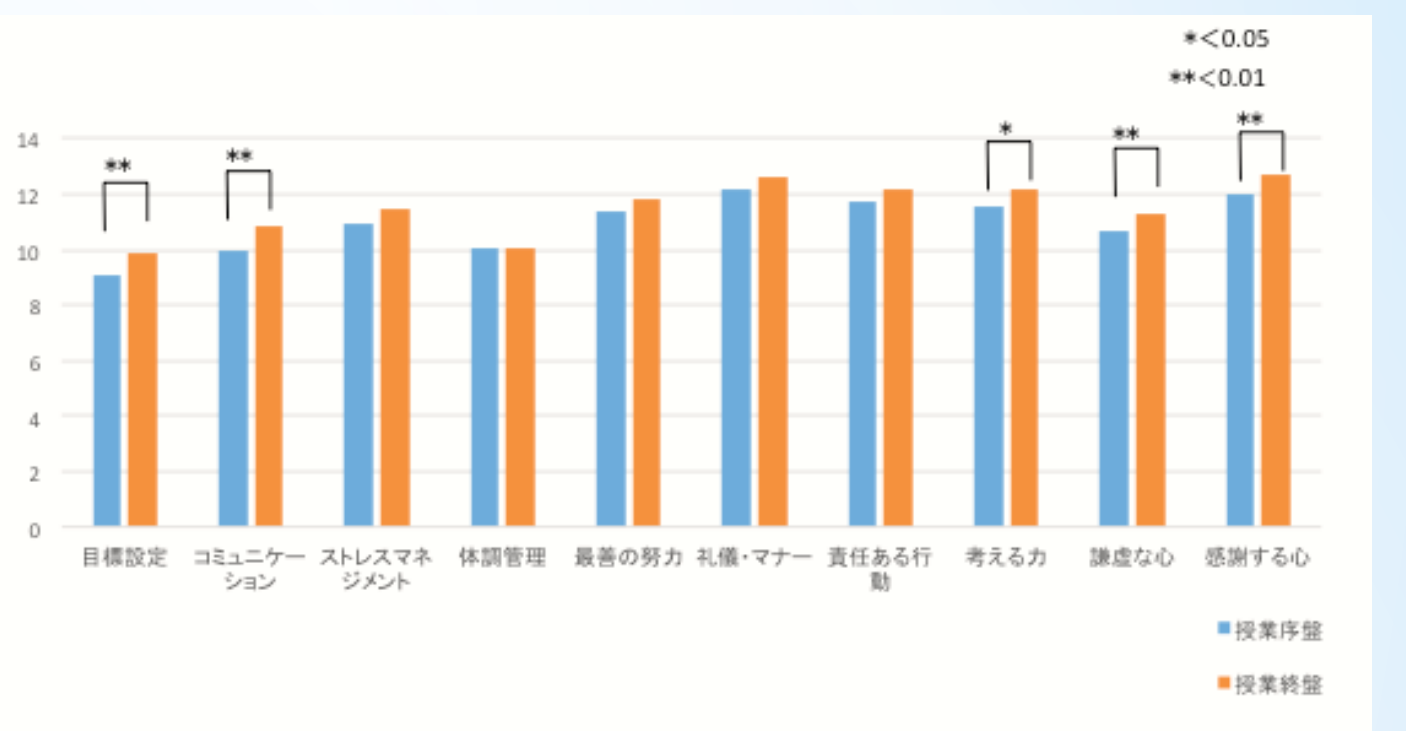


図8. ライフスキル得点 授業序盤と終盤での得点比較

基盤研究 コアテーマ①-2

『大学体育において教員は履修者の運動・スポーツに対する内発的な動機づけに貢献するか？-大学体育における動機づけ雰囲気への検討』

班長：山内賢

班員：佐々木玲子・加藤大仁・永田直也・近藤明彦

はじめに
本班は、大学生の運動やスポーツ活動に対する動機づけを高める授業づくりに関する研究を行っている。運動やスポーツ活動は、身体的な健康の維持・増進のみならず、メンタルヘルスやコミュニケーション力などの心理社会的な要因にも影響を与えている。そのため、運動やスポーツ活動に対する動機づけを高めることは、心身ともに豊かな生活のために必須である。運動やスポーツ活動に対する動機づけと体育授業の関係は、小・中学校での体育授業、大学生の高校で受けた授業内容に関する研究がある。これらの研究では、活動に対する「内発的動機づけ」、授業において内発的動機づけを高める「上達を重視する（熟達志向的）雰囲気」の有効性に関する報告がなされている。そこで今回の報告では、授業における動機づけ雰囲気に注目し、①大学の体育授業の現状分析、②塾生が考える動機づけを高める教師の指導・関わり方に関する調査、③新たな測定尺度の作成を示し、今後の研究活動の展望を述べる。

①大学体育授業の現状分析

まず始めに、現在の体育授業は、履修者の動機づけにどのような影響を与えているか測定・分析した。測定結果は、図1で示した。慶應義塾大学の体育実技では、履修者の授業前の動機づけは高く（内発的）、授業後もその動機づけが維持されていることがわかった。また、種目によっては、授業後により高い動機づけとなることもわかった。しかし、どのような要因が動機づけの維持・向上に影響しているのかは不明なままであった。

②塾生が考える動機づけを高める教師の指導・関わり方に関する調査

履修者の運動やスポーツ活動に対する動機づけを高める要因の検証のため、塾生に対して「運動やスポーツ活動に対する動機づけを高める教師の指導や関わり方」を自由記述アンケートにて聴取した。動機づけ雰囲気には、教師が果たす役割が大きいことがわかっており、本研究ではその点に注目した。聴取内容の例を表1に示す。聴取内容をみていくと、大きく「塾生の取り組みをどの要素（熟達か結果か）で評価しているか」、「塾生を適切に評価しているか」、「教員の塾生に対してどのような態度をとっているか」という要因が影響しているのわかる。この調査を踏まえ、動機づけを高める教師の指導・関わり方を評価する尺度の作成を実施した。

③新たな尺度の作成

現在、調査②の結果をもとに、塾生の運動やスポーツ活動に対する動機づけを高める教師の指導・関わり方を評価する尺度の作成を実施している。作成中の尺度は、表2に示した。塾生に対する測定と因子分析の結果、「熟達への評価」、「熟達への指導」、「成績の重視」、「生徒に対するひいき」という4つの因子に分類された。現在は、質問項目・因子名の再検討を実施している。

今後の研究活動の展望

今後の研究では、まず始めに、作成した尺度を用いて履修者の動機づけが高まる要因を明らかにする。その上で、動機づけを高める授業方法を考案していくこととなる。大学体育授業は、履修者が教育機関において受ける最後の体育授業となる可能性が高く、運動やスポーツ活動を継続する態度を養う最後の機会かもしれない。そのような重要な機会において、教師・授業が果たす役割は大きく、今後もより良い授業に資する知見が得られるように進めたい。

評価する際の要因	動機づけを高める要因	動機づけを下げる指導・関わり方
評価の適切さ	その種目が上手くなる指導 改善方法を教えてくれる 目標・目的が明確な指導をしてくれる 最初はできなくて良いと言ってくれる 上達した時に褒めてくれる 平等に接してくれる 学生の状態を理解している	具体的な改善の指導がない 個人に合う指導をしない できない所ばかり指摘 ミスを責める 落胆したコメント 人と比較する 特定の人のみ関わる
教師の態度	活動を認めてくれる 名前や顔を覚えてくれる 活動を見守ってくれる 成長させようとする 楽しそうに授業をしている チーム全員と関わる 積極的に声をかけてくれる いつでも質問できる	名前や顔を覚えてくれない 人によって対応が違う コミュニケーションを拒否 一緒に活動しない つまらなさそうに授業をやっている 学生に関心がなさそう 関係いふりをする 威圧的

因子	質問項目
熟達への評価	私が課題を克服した際にほめてくれる
	私が上達した時にほめてくれる
	失敗は上達するために必要だと伝えてくれる
熟達への指導	私たちの努力を評価してくれる
	私たちが上達するための明確な目標を示してくれる
	私たちが上達するための改善点を教えてくれる
成績の重視	私たちが上手いプレーできないと落胆する
	私たちができない点ばかり指摘する
生徒に対するひいき	私をほかの人と比較する
	人によって対応を変えている

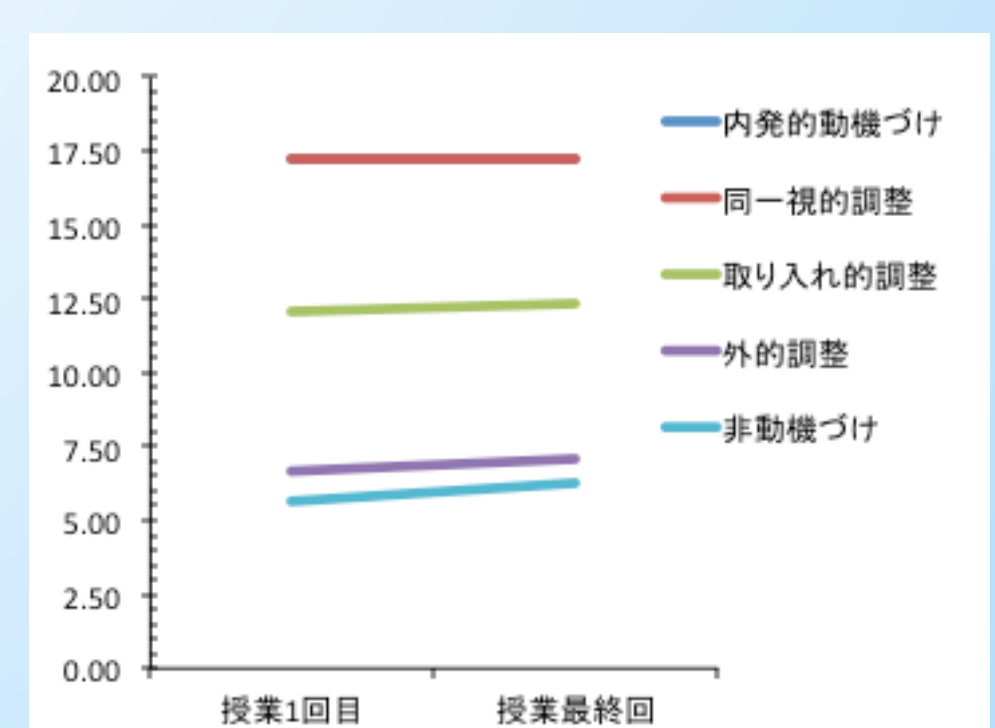


図9. 体育授業前後における運動やスポーツに対する動機づけの変化

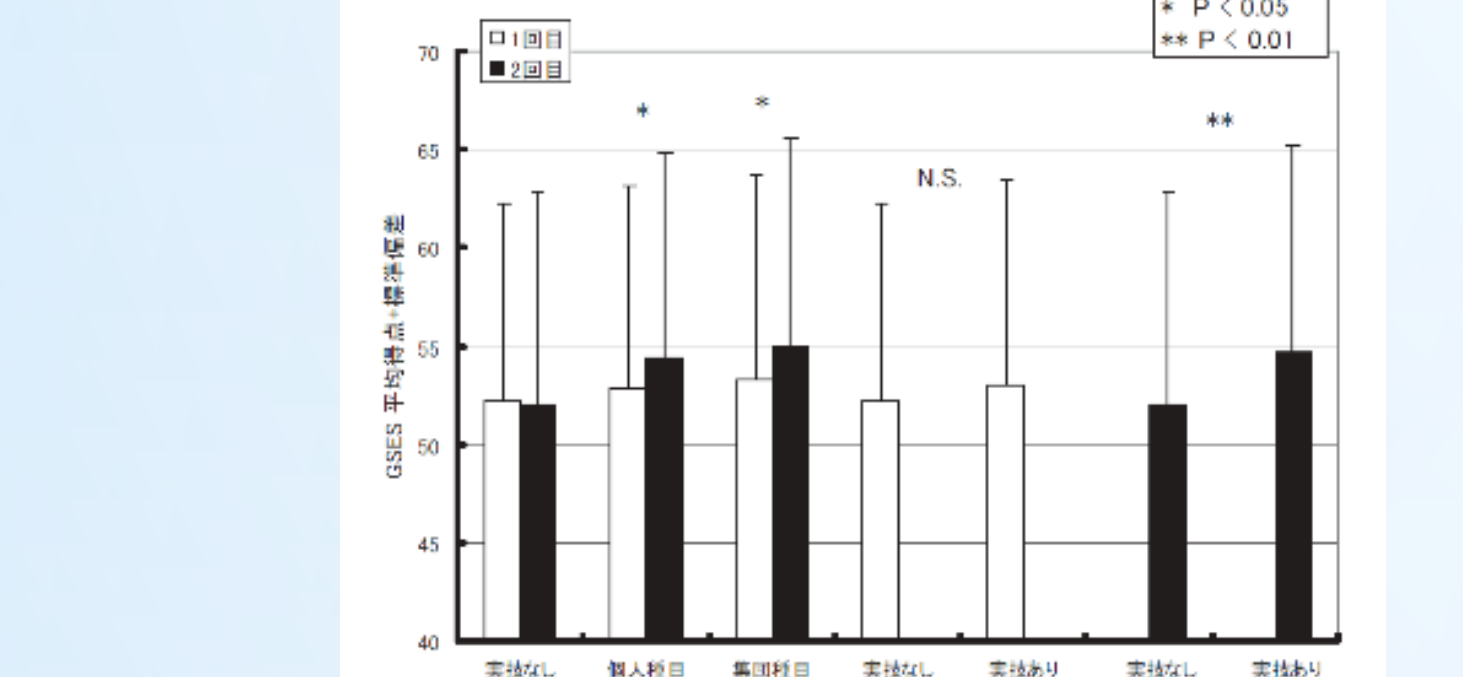


図1. GSESの1回目と2回目の得点および実技履修の有無の比較

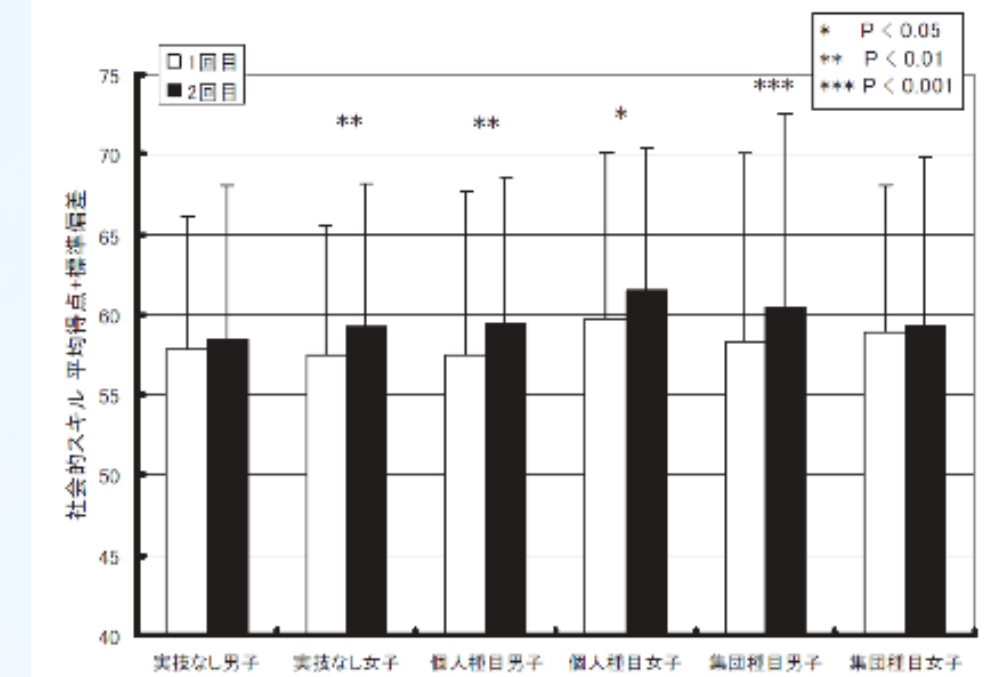
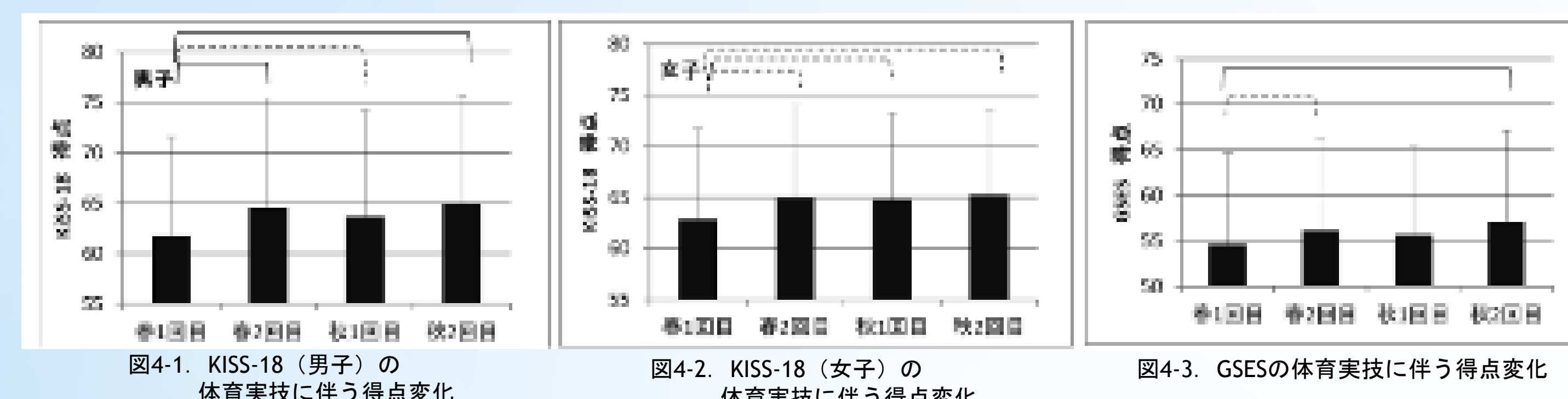
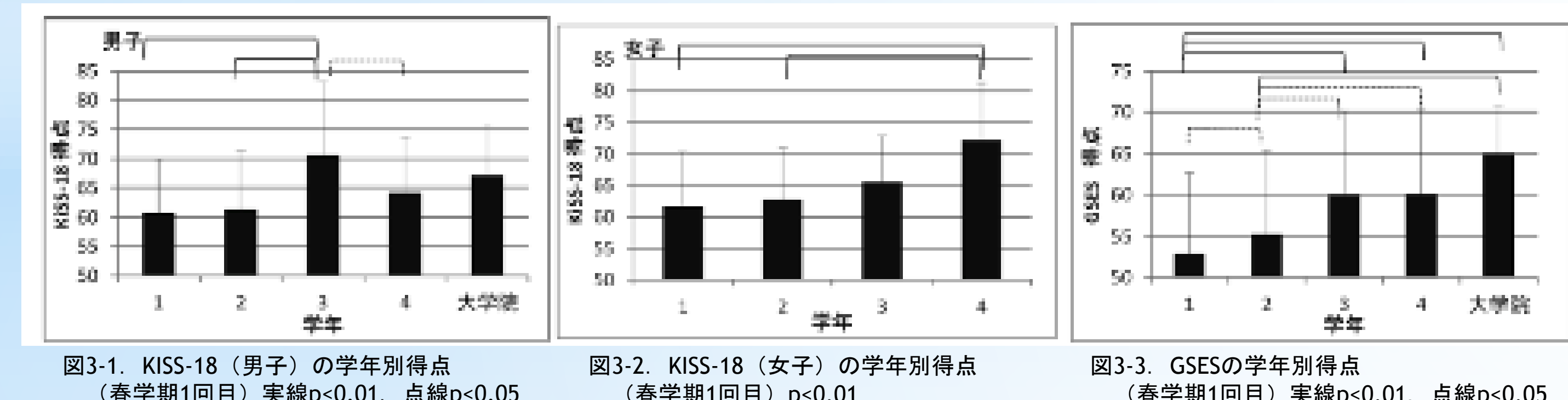


図2. 社会的スキルの1回目と2回目の得点の比較

【報告2】体育実技履修学生の社会的スキルおよび自己効力感の水準に関する基礎的検討（慶應義塾大学体育研究所紀要 第52巻、2013年）

本塾における体育実技履修者を対象に、KISS-18（社会的スキルの指標）およびGSESアンケートを実施し、特に年齢・学年の差、得点分布の実態、春学期と秋学期の変化の有無に関して基礎的検討を行うことを目的とした。図3は社会的スキルとGSES(自己効力感)の学年別得点を示す。全体として、学年が進むにつれて得点が向上する傾向がみられた。図4は社会的スキルとGSESの体育実技実施に伴う変化を示す。1回目（春学期初旬）から4回目（秋学期下旬）に向けて得点が向上する傾向がみられた。

本研究より、社会的スキルや自己効力感に経年による経験の影響、さらには体育実技の実施により高まり、しかもそれは連続履修によって強められる可能性が示唆された。



【報告3】学生の社会的スキル向上を目指した体育実技実践の試み（慶應義塾大学体育研究所紀要 第52巻、2013年）

本研究においては大学における体育実技実施の効果に関して対人関係能力の向上を意図し、コミュニケーションの促進を図るプログラムを取り入れることによる社会的スキル及び自己効力感の変化を検討することを目的とした。プログラム群ではこれまで実施してきた授業展開の中に、コミュニケーション作りやグループワークを意識した内容を毎時間加えた。図5は、プログラム群において得点が有意に向上していることを示している。体育実技が学生のメンタルヘルスの維持や積極的な社会参加に寄与できること、また授業内容を工夫することによってその効果をより高められることが示唆された。

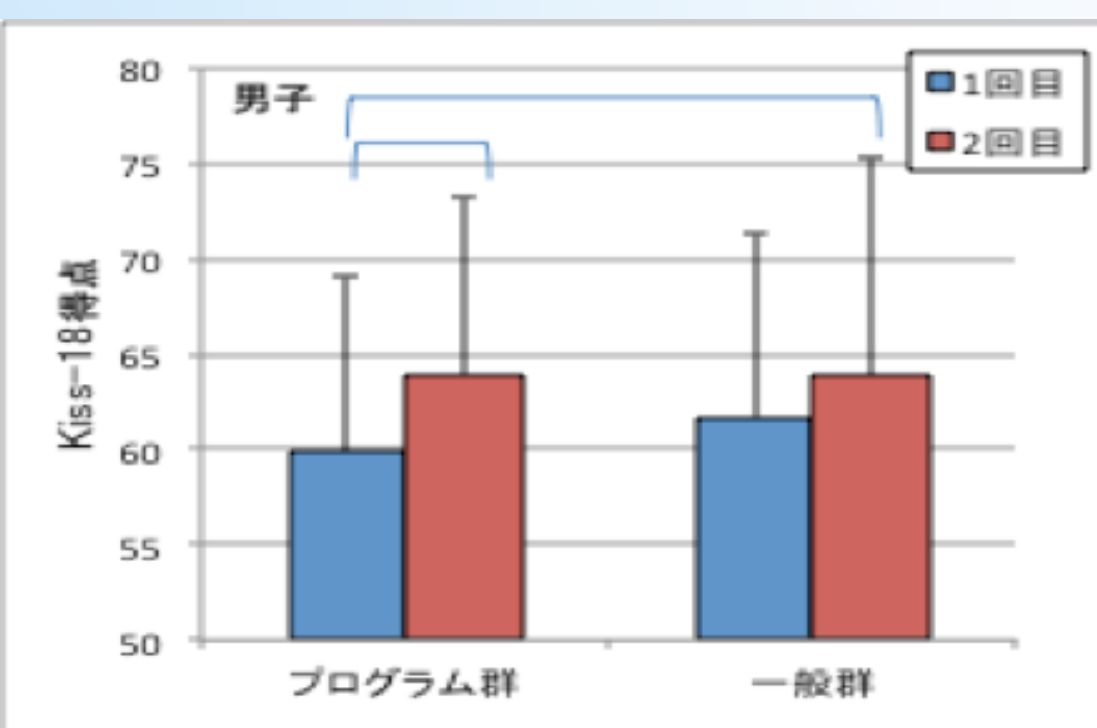


図5-1. KISS-18 (男子) のプログラム群と一般群の体育実技受講に伴う得点変化

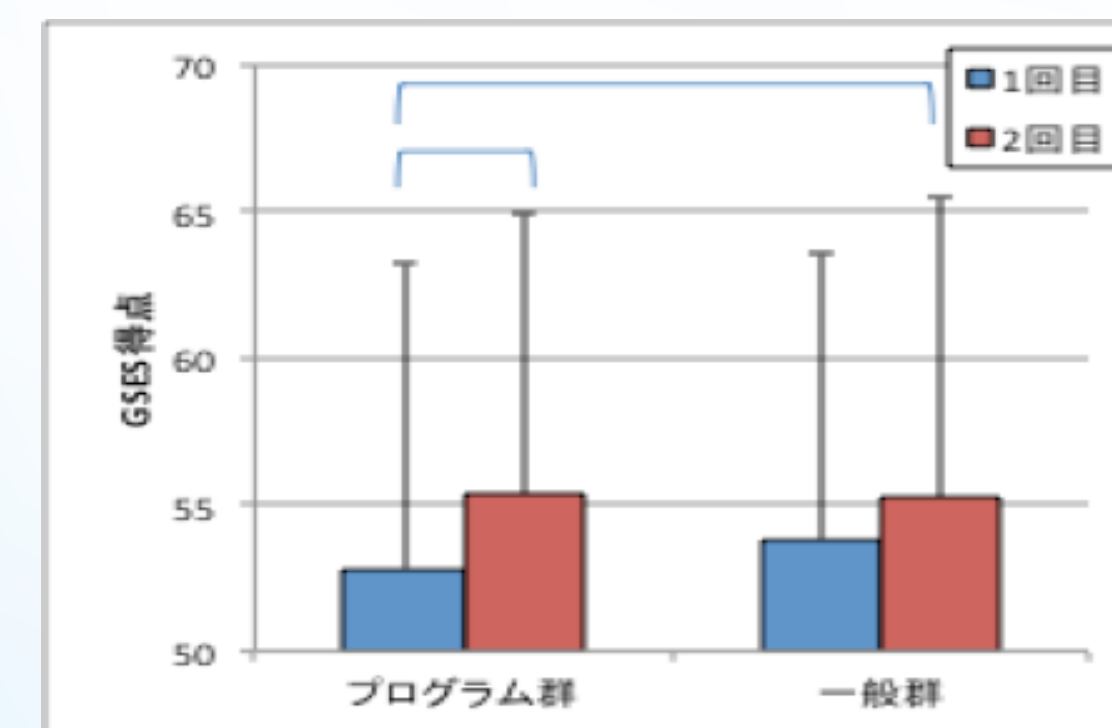


図5-2. GSESのプログラム群と一般群の体育実技受講に伴う得点変化

【報告4】体育実技履修学生の社会的スキル及び自己効力感の変容に関する検討-授業形態の違いによる比較-（慶應義塾大学体育研究所紀要 第54巻、2015年）

夏季または春季休業中に7日間または3泊4日程度の合宿形式で行う集中授業（シーズンスポーツ）においては、受講者の社会的スキルや自己効力感（GSES）の得点変化が通常の体育実技授業（ウォークリースポーツ）や講義授業と異なるであろうか。

図6、7のように、講義科目とウォークリースポーツの間、および講義科目とシーズンスポーツの間に有意な差が見られたが、ウォークリースポーツとシーズンスポーツの間には有意な差が見られなかった。